HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「鼻が長いのは象だ」構文の成立条件
Author(s)	陳, 訪澤
Citation	国語国文研究, 105, 64(1)-50(15)
Issue Date	1997-03-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94775
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_105_64-50.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

「鼻が長いのは象だ」構文の成立条件

陳　訪澤

1．はじめに

「鼻が長いのは象だ」という文について、そのもとの構造は「象ノ鼻ガ長イ」で、つまり、この文はノ格名詞の「象（ノ）」を述部の要素にしたものであると分析することができる。この分析を一般的な形で表すと、次のとおりである。

(1)　X ノ Y+Z　→　(Y+Z) のは X だ

このような例は探せば簡単に見つけるもので、いくらでも挙げることができる。

(2) a　拳銃が盗まれているのは立川グループの基地だ。(大薮春彦『名のない男』)
　　←　立川グループノ基地ノ拳銃ガ盗マレテイル
　b　成長が早いのは十代の女子だ。(渡部 1979)
　　←　十代ノ女子ノ成長ガ早イ
　c　むこうに海が見えるのは太平洋です。(1995.2.10 NHK ひるどき日本列島)
　　←　ムコウニ太平洋ノ海ガ見エル

しかし、二つの名詞が「X ノ Y」の関係にあるからといって、必ずしも、ノ格名詞「X」を述部の要素にして「鼻が長いのは象だ」構文を形成することができるとは限らない。

(3) a　友人ノ田中君ガ入院シタ　→
　　*田中君が入院したのは友人だ。(渡部 1979)
　b　不定形ノマリモガ多イ　→
　　*マリモが多いのは不定形だ。
　c　私ガ三冊ノ辞書ヲ買ッタ　→
　　*私が辞書を買ったのは三冊だ。

これはなぜであろうか。つまり、このタイプの文が成立するための条件は何であろうか。この条件を解明するのが本稿の目的である。

「鼻が長いのは象だ」構文は主題構文の一種である。主題構文は「主題化」という操作によって形成されたものであるという考え方は、三上（1960）以来、すでに広く受け入れられている。本稿もこの考え方を取り入れて、このタイプの文をもとの構造(以下、「主題化以前の構造」と呼ぶ) から主題化操作によって形成されたものとする立場に立って議論を進めたい。[1)]

2．ノ格名詞の意味と「鼻が長いのは象だ」構文の成立

このタイプの文は主題化以前の構造におけるノ格名詞を述部の要素にして形成されたものなので、その成立条件を考える際、まず注目されるのは「の」が表す意味であろう。「の」の意味については学者によっていろいろな分類がなされている。例えば、国立国語研究所（1951）では「の」を22種類（格助詞「が」に相当する「の」を除くと20種類）に分けており、新村出（1955）では13種類に、北原ほか（1981）では15種類に、それぞれ区別している。たぶん最も詳しいのは鈴木康之（1978）で、39種類の意味を挙げている。しかし、ノ格名詞の主題化などの研究にも見られるように、「の」の意味は文法的な有効性を持つものもあれば、あまり文法的な機能を持たないものもある。したがって、本稿ではすべてのノ格名詞を扱うことはできないが、文法的に有効な意味を表すと考えられるノ格名詞について検討してみる。

2-1．属格のノ格名詞

属格のノ格名詞は、このタイプの文の述部の要素になり得る。

(4) a　太郎が頭をなぐったのは次郎だ。(Nakau 1973)
　　←　太郎ガ次郎ノ頭ヲナグッタ
　b　鼻が長いのは象だ。(渡部 1979)
　　←　象ノ鼻ガ長イ

「属格」は普通「所有格」とも呼ばれている。この場合、「X ノ Y」におけるノ格名詞「X」と被修飾名詞「Y」の概念関係によく見られるのは、「X」が全体、「Y」が部分というようなものである。(4)の用例において、「次郎ノ頭」における「次郎」と「頭」、「象ノ鼻」における「象」と「鼻」の関係はいずれもそうである。しかし、次の用例で分かるように、もっと広い意味の属格のノ格名詞がこのタイプの文の述部の要素になり得るのである。

(5) a　オープン価格が最初に広がったのは家電製品。(1995.4.26『読売新聞日刊』)
　　←　家電製品ノオープン価格ガ最初ニ広ガッタ
　b　拳銃が盗まれているのは立川グループの基地だ。(大薮春彦『名のない男』)
　　←　立川グループノ基地ノ拳銃ガ盗マレテイル
　c　松下がスポンサーになっていたのは「パナソニック・レーシングチーム」。(1993.9.16『日本経済新聞』)
　　←　松下ガ「パナソニック・レーシングチーム」ノスポンサーニナッテイタ

これらの用例で述部の要素になっているのは、(5 a) では「所有」、(5 b) では「所在」、(5 c) では「所属」を表すノ格名詞である。

しかし、属格のノ格名詞だからといって、すべてこのタイプの文の述部の要素になり得るとは限らない。なりにくい場合もあれば、なり得ない場合もある。まず、述部の要素になりにくいノ格名詞を見てみよう。例えば、次の用例ではノ格名詞は述部の要素になり得ないと考えられている。

(6)　次郎ノ妹ガ私ヲ訪ネテキタ　→
　　*妹が私を訪ねてきたのは次郎だ。(渡部 1979)

文脈から離れてこの文だけ与えられると、確かに非文法的な文のように見える。だが、一定の文脈の中に置けば、この文は絶対に言えないものでもないようである。例えば、「私」の旧友である次郎と花子にはそれぞれ何人かの兄弟がいて、有名人になった「私」と写真を取りたいので、その兄弟たちが「私」を訪ねてきたとしよう。この場合、次のような対比の文脈で表現するなら、(6)の文は十分に使えるであろう。

(7)　次郎と花子の兄弟たちが訪ねてきたので、一緒に写真を取らせてあげたよ。
　　妹が私を訪ねてきたのは次郎で、弟が私を訪ねてきたのは花子だ。

ただし、このような文脈がなければ、このタイプの文は成立しにくい。

対比の文脈のほかに、疑問の文脈も不自然な文を自然な文にする力がある。例えば、次の用例も文脈がなければ、おそらく許容度が低く感じられるであろう。

(8)　英語ノ試験ガアッタ　→
　　?試験があったのは英語だ。

しかし、もし今は学校の受験シーズンで、連日試験が行われ、今日も試験があったとして、「今日も試験があったの？　それはどんな科目だった？」というような疑問文を想定すれば、その答えとして(8)の文は自然に使われる。

つまり、属格のノ格名詞によるこのタイプの文の成立は、対比や疑問などの文脈の設定を必要とする場合がある。こうした特定の文脈があれば、文は適格の表現として成立できるが、それがないと、文は成立しにくいのである。

ところが、次の用例はどう考えても文脈の設定ができない。そのため、ノ格名詞は述部の要素になり得ないと言わなければならない。

(9) a　H新聞ノ山本記者ガ来タ　→
　　*山本記者が来たのはH新聞だ。
　b　M高校ノアノチームガ勝ッタ　→
　　*あのチームが勝ったのはM高校だ

これは「X ノ Y」における被修飾名詞「Y」が固有名詞、代名詞または指示語など、特定性と具体性のような概念特徴を持つ名詞になっているからである。もし「Y」の名詞をある程度の抽象性と一般性を持つ名詞に変えれば、文脈の設定が可能になり、ノ格名詞も述部の要素になり得るようになる。

(10) a　H新聞ノ記者ガ来タ　→
　　記者が来たのはH新聞だ。(カメラマンが来たのはQ新聞だ。)
　b　M高校ノ野球チームガ勝ッタ　→
　　野球チームが勝ったのはM高校だ。(サッカーチームが勝ったのはN高校だ。)

このようなことから、属格のノ格名詞の場合は、文脈の設定が可能かどうかによって、「鼻が長いのは象だ」構文の成立が決められると言える。菊地 (1990) では、ノ格名詞の主題化の許容度も「文脈の力」によって支えられていると指摘している。「文脈の力」が「鼻が長いのは象だ」構文の成立においても機能しているということは、同

じ主題構文の共通点であると言えよう。

2-2. 論理関係のノ格名詞

「論理関係」とは、論理上の「ガ格」や「ヲ格」のような関係のことである。この場合、「X ノ Y」における被修飾名詞「Y」はすべて動作などの用言的な内容を表すものである。このようなノ格名詞は、ほとんどこのタイプの文の述部の要素になり得る。

(11) a　全農が参入を考えているのは、食糧庁の輸入業務のうち民間入札に開放する分。(1994.8.9『朝日新聞日刊』)

← 全農ガ食糧庁ノ輸入業務ノウチ民間入札ニ開放スル分ノ参入ヲ考エテイル

b　米側が貸与を希望しているのは、時計や弁当箱、衣類など計約三十点。(1993.12.1『北海道新聞日刊』)

← 米側ガ時計ヤ弁当箱、衣類ナド計約三十点ノ貸与ヲ希望シテイル

c　成長が早いのは十代の女子だ。(渡部 1979)

← 十代ノ女子ノ成長ガ早イ

これらの文において、述部の要素になっているノ格名詞は、それぞれ、(11 a) では「民間入札ニ開放スル分ニ (参入スル)」という「ニ格」、(11 b) では「時計ヤ弁当箱、衣類ナド計約三十点ヲ (貸与スル)」という「ヲ格」、(11 c) では「十代ノ女子ガ (成長スル)」という「ガ格」に相当するものであると考えられる。

論理関係のノ格名詞によるこのタイプの文の成立も文脈の設定を必要とする場合がある。例えば、次の用例は文脈を設定しないと、かなり不自然に感じられるであろう。

(12)　彼女ガ車ノ運転ヲ習ッテイル　→

??彼女が運転を習っているのは車だ。

これは普通、「彼女が運転を習っている」と言う時、「車を運転すること」という意味がすでに理解されており、「車だ」と言い足すと蛇足になるからである。しかし、もし二人の女の子が同じ自動車学校で運転を習っていて、一人は普通の車の運転を、もう一人はトラックの運転を習っているとして、トラックの運転を習う女の子が次のような対比の文脈で表現するなら、これは自然な文になるであろう。

(13)　彼女が運転を習っているのは車だ。私が運転を習っているのはトラックだ。

2-3. 同格のノ格名詞

同格のノ格名詞というのは、「X ノ Y」における「X」と「Y」が同一の人物や同じものといった同じ内容を表す場合のノ格名詞である。この場合、「の」によって結びつけられた二つの名詞は、概念的に必ず同じ種類の集合体と個別体の関係になっている。「X」と「Y」に来る名詞の組み合わせにより、「X ノ Y」は二つのパターンがある。一つは「集合体＋個別体」のパターンで、「X ノ Y」は「X デアル Y」に言い換えられるので、これを「D型同格」と呼ぶ。

(14) a　医者ノ兄

b　嘘ツキノ太郎

c　友人ノ田中君

d　委員長ノ彼

もう一つはその逆の「個別体＋集合体」というパターンで、「X ノ Y」は「X トイウ Y」に言い換えられるので、これを「T型同格」と呼ぶ。

(15) a　兄チャンノバカ
　　b　太郎ノ嘘ツキ
　　c　富士ノ山
　　d　南ノ方向

この二種類の同格のノ格名詞を述部の要素としてこのタイプの文を形成する場合、次に示すように、T型同格のノ格名詞による文は成立できるが、D型同格のノ格名詞による文は成立できない。

(16) a　むこうに海が見えるのは太平洋です。(1995.2.10 NHK ひるどき日本列島)
　　←　ムコウニ太平洋ノ海ガ見エル（T型同格）
　　b　*田中君が入院したのは友人だ。(渡部 1979)
　　←　友人ノ田中君ガ入院シタ（D型同格）

同格関係の二つの名詞のうち、個別体を表す名詞はよく特定された具体的な概念を持つものが使われる。これはこの部分によく固有名詞や代名詞などが現れているということからも分かる。前の属格のノ格名詞の検討において、「X ノ Y」における「Y」の名詞が具体性を持つ名詞の場合、このタイプの文は成立できないと述べたが、この条件は同格の場合にも適用される。D型同格において「Y」の名詞が具体性のある名詞なので、その前のノ格名詞は述部の要素になり得ないが、T型同格はその逆なので、そのノ格名詞は述部の要素になり得る。

また、同格のノ格名詞には、形態的に(14)と(15)の場合と違う次のようなものもある。

(17) a　ビールのよく冷えたのが飲みたい。(鈴木忍 1978)
　　b　洋服の古くなったのをすてた。(鈴木忍 1978)
　　c　辞書の新しいのがいい。(陳 1994 a)
　　d　タイの明石沖で取れるのが最上だ。(陳 1994 a)

これらの用例において、「X ノ Y」の「Y」に当たる部分は名詞ではなく、形式名詞「の」を被修飾名詞とする名詞節である。しかし、「X」と「Y」の概念関係は(14)の場合と同じように、同じ種類の集合体と個別体の関係なので、D型同格である。D型同格のノ格名詞は(16 b)に見たように、述部の要素になり得ないと述べたが、(17)の主題化以前の構造からノ格名詞を述部の要素にすると、次に示すように、形成されるのは適格の文である。

(18) a　ビールノヨク冷エタノガ飲ミタイ　→
　　よく冷えたのが飲みたいのはビールだ。
　　b　洋服ノ古クナッタノヲステタ　→
　　古くなったのをすてたのは洋服だ。
　　c　辞書ノ新シイノガイイ　→
　　新しいのがいいのは辞書だ。
　　d　タイノ明石沖デ取レルノガ最上ダ　→

明石沖で取れるのが最上なのはタイだ。

同じD型同格なのに、なぜノ格名詞は述部の要素になれるものとなれないものとに分かれるのであろうか。その原因はやはり「Y」の名詞（名詞節）の概念特徴にあると筆者は考える。(16 b) では、主題化以前の構造における「Y」の名詞が固有名詞なので、全く一般性がないと言っていい。これに対して、⑱では、「Y」の部分が名詞節なので、具体性を有しながらある程度の一般性も観察できる。さらに表層構文を比べてみると、(16 b) では、主題化以前の構造から変換された後でも「X」に相当する「友人」と「Y」に相当する「田中君」が同種類の集合体と個別体の関係であることは変わっていないが、⑱では、「X」に相当する名詞と「Y」に相当する名詞節の集合体と個別体の関係は主題化以前の構造から変換された後に、正反対に変わっている。(18 a) を例にすれば、主題化以前の構造では「ビール」が集合体で、「ヨク冷エタノ」が個別体である。つまり、「ビール」はいろいろなビールを含む総称名詞で、「ヨク冷エタノ」はいろいろなビールの中の一種である「よく冷えたビール」のことである。それが表層構文になると、「よく冷えたの」は集合体に変わって、よく冷えたいろいろな飲物を意味する総称名詞となり、「ビール」は個別体に変わって、よく冷えたいろいろな飲物の一種となっている。⑱のその他の用例についても同じことが言える。つまり、D型同格の場合、主題化以前の構造からこのタイプの文に変換された後に、同種類の集合体と個別体の関係にある二つの名詞（または名詞と名詞節）が正反対の関係に変わるかどうかによって、その文が成立できるかできないか分かれるのである。正反対の関係に変わる場合は、このタイプの文が成立できるが、変わらない場合は、このタイプの文は成立できない。

⑱と (16 a) を比較してみると、主題化以前の構造において正反対だった二つの名詞（または名詞と名詞節）の語順は、表層構文では同様の語順になっているということに気がつくであろう。つまり、T型同格にしてもD型同格にしても、ノ格名詞が述部の要素になる場合、表層構文における二つの名詞（または名詞と名詞節）は同様の語順になるのである。この場合、必ず主題にあるのは集合体で、述部にあるのは個別体である。つまり「は」をはさんで、二つの名詞（または名詞と名詞節）の語順は次のようになるのである。

⑲　集合体＋は＋個別体

この語順はこのタイプの文だけでなく、名詞主題文においても守られている。例えば、

⑳ a　魚は鯛がいい。
　 b　車はベンツに乗っている。
　 c　辞書は新しいのがいい。
　 d　洋服は古くなったのをすてた。

これらの文においても、同種類の集合体と個別体の関係にある二つの名詞（または名詞と名詞節）が観察できる。しかも、(16 a) と⑱の文と同じように、主題には集合体、述部には個別体が来るという⑲の語順である。もしこれらの文における二つの名詞（または名詞と名詞節）の位置を入れ換えると、次に示すように、(21 c) と (21 d) は適

格の文として成り立つが、(21 a) と (21 b) は非文法的な文になる。

(21) a *鯛は魚がいい。
b *ベンツは車に乗っている。
c 新しいのは辞書がいい。
d 古くなったのは洋服をすてた。

これは、二つの名詞（または名詞と名詞節）の位置を入れ換えると、(21 c) と (21 d) では依然として、(19)と同様な語順になっているが、(21 a) と (21 b) では変わっているからである。つまり、同種類の集合体と個別体の関係にある二つの名詞（または名詞と名詞節）が表層構文において主題と述部に分かれる場合、必ず(19)のように、主題には集合体の名詞（名詞節）、述部には個別体の名詞（名詞節）が来るという語順配列でなければならない。これは「鼻が長いのは象だ」構文だけでなく、主題構文全体に共通する成立条件の一つであると考えられる。[2)]

2-4. 属性・性質のノ格名詞

属性・性質のノ格名詞というのは、「X ノ Y」における「Y」の名詞が示す内容に対して、外部と内面の両方から修飾するノ格名詞のことである。外部は色や形、様式などを指し、内面は素質や材料、中味などを指す。

(22) a 青ノ色鉛筆（色）
b 不定形ノマリモ（形）
c 二階建テノ家（様式）
d 神経質ノ人（素質）
e 銀ノスプーン（材料）
f 英語ノ教科書（中味）

属性・性質のノ格名詞は、基本的には述部の要素になり得ない。例えば、次の主題化以前の構造から形成されたこのタイプの文は、一般的な表現としてはほとんど言わないであろう。

(23) a 二階建テノ家ガ倒レタ →
*家が倒れたのは二階建てだ。
b 不定形ノマリモガ多イ →
*マリモが多いのは不定形だ。
c 青ノ色鉛筆ガヨク売レル →
*色鉛筆がよく売れるのは青だ。
d 銀ノスプーンガ盗マレタ →
*スプーンが盗まれたのは銀だ。

ただし、特定の文脈を設定すれば、言える場合もある。例えば(23 a)、(23 c) と (23 d) について、それぞれ次のような文脈を設定すると、文は一応許容できるようである。

(24) a 太郎と次郎はそれぞれ、二階建てと三階建ての家を持っているが、地震で太郎の家が倒れたのは二階建てで、次郎の家が倒れたのは三階建てだ。
b 色鉛筆と蛍光ペンの特定の色のものを買う人が多い。色鉛筆がよく売れるのは青だ。蛍光ペンがよく売れるのは黄色だ。

c　食器のフォークとスプーンが一部見あたらない。これは金と銀のものだから盗まれたに違いない。調べたら、フォークが盗まれたのは金で、スプーンが盗まれたのは銀だ。

実際の用例としても、属性・性質のノ格名詞によるこのタイプの文と考えられるものがある。

(25)　ジプシーみたいな女の姿がチラホラ目につくのは、ポルトガルと中国人との混血かもしれない。(森瑤子『砂の家』)

←　ポルトガルト中国人トノ混血ノ（～）女ノ姿ガチラホラ目ニツク

それでは、属性・性質のノ格名詞は基本的に述部の要素になり得ないというのは、どういうことなのであろう。(24)と(25)から見れば、これは述部の要素になり得るのではないかと考えるかもしれない。しかし、この場合、注意しなければならないのは、「X ノ Y」において「X」が「Y」の属性を示すという主題化以前の構造における修飾関係は、表層構文では、主題の従属節にある「Y」が集合体、述部に置かれた「X」が個別体という同格の関係に変わっているということである。すなわち、このタイプの文に変換された後に、同格の関係に変わるような属性・性質のノ格名詞は述部の要素になり得るが、そうでない場合は述部の要素になり得ない。(23 b) においては、主題化以前の構造から表層構文に変換された後に「X」と「Y」が同格の関係に変わっていないため、その文は成立できない。変換された後に「X」と「Y」の関係が変わったため、文が成立しても本当の意味での属性・性質のノ格名詞によるものとは言えないであろう。

2-5. 数量のノ格名詞

数量のノ格名詞は、「X ノ Y」における「X」の名詞が数量関係の名詞であるというようなノ格名詞である。しかし、「X」の名詞が数量名詞でも、すべてここで言うような数量のノ格名詞とは限らない。属性・性質のノ格名詞と考えるべきものもある。

(26) a　三日間の取材が終わった。

*三日間、取材が終わった。

b　6畳の部屋を借りる。

*部屋を6畳借りる。(奥津 1983)

c　五回の講義を予定している。

講義を五回予定している。

d　数人の学生が質問した。

学生が数人質問した。(益岡 1981)

(26 a) と (26 b) は属性・性質のノ格名詞で、(26 c) と (26 d) は数量のノ格名詞である。つまり、基本的な意味を変えずに連用修飾語に変換できるのが数量のノ格名詞ということである。[3] このような変換はいわゆる「数量詞遊離」と呼ばれる現象である。[4]

数量のノ格名詞は、連用修飾語に変換すると、(26 c) のように内容的にも統語的にも述語の修飾語になる場合と、(26 d) のように統語的には述語の修飾語になるが、内容的にはやはり名詞（格成分）と関連する場合とに分けられる。前者はほとんど数量

関係の頻度名詞、期間名詞、順序名詞なので、これらの数量のノ格名詞は述部の要素になり得る。

(27) a　五回ノ講義ヲ予定シテイル　→
　　講義を予定しているのは五回だ。
　b　今日、一時間ノ英会話授業ガアル　→
　　今日英会話授業があるのは一時間だ。
　c　二人目ノ日本人ガ同賞ヲ受ケタ　→
　　日本人が同賞を受けたのは二人目だ。

後者は個数名詞によるもので、重量や長さ、容積などの数量名詞も基本的にこれに準じて考えることができる。ノ格名詞としての個数名詞は述部の要素になり得ない。

(28) a　私ガ三冊ノ辞書ヲ買ッタ　→
　　*私が辞書を買ったのは三冊だ。
　b　数人ノ学生ガ質問シタ　→
　　*学生が質問したのは数人だ。
　c　今月、千キロワットノ電気ヲ使ッタ　→
　　*今月、電気を使ったのは千キロワットだ。

個数名詞である数量のノ格名詞は、同格のノ格名詞としても捉えることができる。この場合、ほとんど「X」の名詞が具体的な数字で、「Y」の名詞が普通の名詞であるということから、「X ノ Y」は「個別体＋集合体」というパターンのT型同格と思われやすいが、これは錯覚である。このような「X ノ Y」は「X デアル Y」にしか言い換えられないので、実はT型同格ではなく、「集合体＋個別体」というパターンのD型同格である。[5)]

(29) a　三冊ノ辞書　→
　　三冊デアル辞書
　　*三冊トイウ辞書
　b　数人ノ学生　→
　　数人デアル学生
　　*数人トイウ学生
　c　千キロワットノ電気　→
　　千キロワットデアル電気
　　*千キロワットトイウ電気

D型同格では「X」が集合体、「Y」が個別体という関係になっているので、ノ格名詞としての個数名詞が述部の要素になり得ない原因は自然に説明される。

2-6. その他のノ格名詞

その他のノ格名詞には、例えば次のようなものがある。

(30) a　岡山ノオジサンガ病気ニナッタ　→
　　*おじさんが病気になったのは岡山だ。(渡部 1979)
　b　岡山ノ人々ガ親切ダ　→
　　人々が親切なのは岡山だ。

c　昨日ノ傷ガマダ痛ム　→
　*傷がまだ痛むのは昨日だ。
d　昨日ノ風ガ強カッタ　→
　風が強かったのは昨日だ。

(30 a) と (30 b) で述部の要素になっているのは場所のノ格名詞で、(30 c) と (30 d) で述部の要素になっているのは時間のノ格名詞である。しかし、同じ意味のノ格名詞なのに、述部の要素になれるものとなれないものとに分かれるのはなぜであろうか。

まず、(30 a) と (30 b) について見てみよう。これらの主題化以前の構造における「X ノ Y」の被修飾名詞「Y」を比較してみると、(30 a) の「オジサン」は特定された具体的な概念を持つ名詞であり、(30 b) の「人々」は具体性のない一般的な名詞であると言える。というのは、普通「オジサン」と言う時、自分と親族関係にある人のことを指す場合が多く、他人にとっては一般性のない特定の人間だからである。しかし、もし特定の文脈を設定して「オジサン」にある程度の一般性を持たせることができれば、(30 a) の文も絶対に使えないことはないと考えられる。例えば、話者には数人のおじさんとおばさんがいて、全国各地に住んでいるとしよう。そのうちの岡山県に住んでいるおじさんと青森県に住んでいるおばさんが病気になったことを、自分の家族で話題に取り上げる時、次のように表現することができるだろう。

(31)　おじさんとおばさんが病気になったという連絡があった。おじさんが病気になったのは岡山で、おばさんが病気になったのは青森だ。

ただし、これは極めて極端な文脈であって、普通の表現としてはもちろん言わない。(30 a) と (30 b) のノ格名詞をよく見ると、前述の属格のノ格名詞と通じるところがあることに気がつくであろう。場所のノ格名詞は、広い意味の属格のノ格名詞としても捉えられるのである。

次に、(30 c) と (30 d) については、時間のノ格名詞が述部の要素になると、本来の被修飾名詞との関連がブロックされ、述語と関係を結ぶようになったからだと解釈することができる。(30 c) では、述部の要素になっている時間のノ格名詞と述語との統語上の関係が成立しないため、表層構文は非文法的な文になっているが、(30 d) ではその関係が立派に成立するので、表層構文は文法的な文である。時間名詞は数量名詞と同じように、ノ格名詞から連用修飾語に変換できる場合と変換できない場合とがある。

(32) a　昨日の傷がまだ痛む。
　*昨日、傷がまだ痛む。
b　昨日の風が強かった。
　昨日、風が強かった。

これを「時間名詞遊離」とでも呼ぶことにしよう。(32)を前の (30 c)、(30 d) と関連して見れば、「遊離」できるような時間のノ格名詞は述部の要素になり得るが、「遊離」できない時間のノ格名詞は述部の要素になり得ないという結論に到達する。

3．「鼻が長いのは象だ」構文の成立に関する制限条件

以上の検討で分かるように、「鼻が長いのは象だ」構文の成立を決めるには、文脈の設定が大きな影響力を持っている。一見成立できないような文でも、特定の文脈を設定すれば成立できるようになり、文脈の設定ができない場合は必ず成立できない。しかし、文脈の設定はいくつかの条件によって、制限される場合がある。

3-1．具体性名詞条件

文脈の設定に最も大きな影響を与えるのは以上でも述べたように、「X ノ Y」における「Y」の名詞が固有名詞、代名詞または指示語など、特定された具体的な概念を持つ名詞の場合である。「Y」の部分にこのような名詞が現れると、文脈の設定がほとんどできないため、ノ格名詞は述部の要素になり得ない。例えば、用例の(9)と(16 b)がその例である。この条件は属格と同格以外のノ格名詞にも適用される。

(33) a　君ノコノ説明ガ不十分ダ　→
　　*この説明が不十分なのは君だ。
　b　銀ノアレガ盗マレタ　→
　　*あれが盗まれたのは銀だ。

固有名詞、代名詞および指示語は特定の物事を示す語で、集合体と個別体のうち、常に個別体を表すものであると言ってよい。「Y」の部分にこのような名詞が現れる場合、「X」のノ格名詞が述部の要素になると、主題に個別体の名詞が置かれることになる。これは主題構文の成立条件に反するため、非文法的な文になってしまうのである。逆に「X」の部分にこのような名詞が現れると、ノ格名詞が述部の要素になることは適格の主題構文を作ることになるので、その文はほとんど成立することができる。ノ格名詞が被修飾名詞より具体性のあるものでなければならないというこの条件を、「具体性名詞条件」と呼ぶことにする。

3-2．所属直接成分格順位条件

ノ格名詞を内部要素とする直接成分の格順位も、文脈の設定に影響を与えるものである。主題化以前の構造において、「X ノ Y＋格助詞」という直接成分の格順位が高ければ高いほど、その中のノ格名詞は述部の要素になりやすい。[6]

(34) a　東京ノ物価ガ高イ　→
　　物価が高いのは東京だ。
　b　ハンカチノキレイニ洗ッタノヲ持ッテキタ　→
　　きれいに洗ったのを持ってきたのはハンカチだ。
　c　私ガ二階ノ部屋デ食事ヲシタ　→
　　*私が部屋で食事をしたのは二階だ。
　d　彼女ガ次男ノ出産デ仕事ヲヤメタ　→
　　*彼女が出産で仕事をやめたのは次男だ。

一般的に言えば、直接成分がガ格の場合、その中のノ格名詞は最も述部の要素になりやすい。(34 c)の「二階ノ」と(34 d)の「次男ノ」は、それぞれ低い順位の「場

所」のデ格と「原因」のデ格の中にあるため、述部の要素になり得ない。この条件を「所属直接成分格順位条件」と呼ぶことにする。

3-3. 情報重要度条件

形成された「鼻が長いのは象だ」構文において、主題の部分が話題として、述部の部分が説明として、それぞれ、どの程度の重要な情報を提供しているかということも、文脈の設定に影響する原因の一つである。

(35) a　アノ会社ノ社員ガ事件ニ巻キ込マレタ　→
　　社員が事件に巻き込まれたのはあの会社だ。
　b　アノ会社ノ社員ガ家ニ帰ッタ　→
　??社員が家に帰ったのはあの会社だ。
　c　彼女ガ船ノ運転ヲ習ッテイル　→
　　彼女が運転を習っているのは船だ。
　d　彼女ガ車ノ運転ヲ習ッテイル　→
　??彼女が運転を習っているのは車だ。

これらの表層構文において、(35 a) は主題の部分が、(35 c) は述部の部分がある程度の重要な情報を提供していると考えられるので、自然に普通の一般的な状況と比較して、対比の文脈が設定されやすい。これに対して、(35 b) と (35 d) のようなごく普通のことしか表さない文は、特別な文脈を設定しない限り、不自然な文であろう。「鼻が長いのは象だ」構文の成立に関するこの条件を「情報重要度条件」と呼ぶことにする。

3-4. 関係緊密度条件

「X ノ Y」における「X」と「Y」の意味上の関係が緊密であればあるほど文脈が設定しやすくなるので、形成された「鼻が長いのは象だ」構文も自然な文として成立しやすい。逆に「X」と「Y」の関係が遠くなると、文脈の設定が難しくなるので、ノ格名詞も述部の要素になり得なくなる。この条件は属格のノ格名詞の場合にしか適用されない。

(36) a　彼ノ上着ガ汚レテイル　→
　　上着が汚れているのは彼だ。
　b　彼ノ友達ノ上着ガ汚レテイル　→
　*友達の上着が汚れているのは彼だ。

(36 b) において、「X」に相当する「彼」と「Y」に相当する「友達ノ上着」との関係が遠すぎて、自然な文脈を設定することはほとんど不可能である。したがって、そのノ格名詞は述部の要素になり得ない。[7] 一方、(36 a) では「X」と「Y」の関係は近いので、自然な文脈が設定しやすく、形成されたこのタイプの文の文法性も高くなる。

(37) a　A君ノ背ガ高イ　→
　　背が高いのはA君だ。
　b　A君ノ家賃ガ高イ　→
　？家賃が高いのはA君だ。

(37 a) と (37 b) を比べれば分かるように、「A君」と「家賃」の関係より、「A君」

と「背」の関係のほうが緊密なので、形成されたこのタイプの文も(37 a)のほうが(37 b)より自然である。また「背」が「A君」の一部分であるのに対して、「家賃」は「A君」と必ずしも必然的な関係があるとは考えられないということから、「X ノ Y」において「X」と「Y」が全体と部分の関係の場合、ほとんど文法性の高いこのタイプの文を形成することができると予測される。

(38) a　彼女ノ目カラ涙ガコボレタ　→
　　目から涙がこぼれたのは彼女だ。
　b　コノ部屋ノ隅々マデ掃除ヲシタ　→
　　隅々まで掃除をしたのはこの部屋だ。

(38)の用例が示したように、「X」と「Y」が全体と部分の関係である場合は「所属直接成分格順位条件」に拘束されないこともあり得る。この条件を「関係緊密度条件」と呼ぶことにする。

以上、「鼻が長いのは象だ」構文の成立に関する四つの制限条件を考えてみたが、このうち、「具体性名詞条件」と「所属直接成分格順位条件」は文法上の条件であり、「情報重要度条件」と「関係緊密度条件」は語用論的な条件である。「鼻が長いのは象だ」構文が成立できるかどうかを決めるのは文法的な条件で、成立しやすいかどうかを決めるのは語用論的な条件である。

4．おわりに

本稿で述べたことを総括すると、「鼻が長いのは象だ」構文の成立条件について、ノ格名詞の意味と文脈の設定から次のようにまとめることができる。

(1)　属格、論理関係およびT型同格のノ格名詞による「鼻が長いのは象だ」構文は成立することができる。場所のノ格名詞は属格のノ格名詞として捉えることができる。

(2)　D型同格、属性・性質および個数名詞のノ格名詞による「鼻が長いのは象だ」構文は基本的に成立することができない。ただし、D型同格と属性・性質のノ格名詞が述部に置かれた後に、「は」をはさんで、もとの被修飾名詞と「集合体＋は＋個別体」という語順配列になる場合は成立することができる。

(3)　個数名詞以外の数量のノ格名詞と時間のノ格名詞は連用修飾語に変換できる場合、その「鼻が長いのは象だ」構文は成立できるが、変換できない場合は成立できない。

(4)　「鼻が長いのは象だ」構文の成立には文脈の設定が大きく影響しているが、文脈の設定は「具体性名詞条件」、「所属直接成分格順位条件」、「情報重要度条件」、「関係緊密度条件」という四つの条件によって制限されている。

注

1)　本稿における片仮名の表記は、つまり「主題化以前の構造」に相当するものである。

2)　名詞主題文については、柴谷(1978)の第4章でも本稿と似た捉え方をしている。

3） 数量名詞によるノ格名詞に「属性・性質」と「数量」の二種類があるということは奥津（1983）でも指摘している。

4） 「数量詞移動」とも呼ばれている。詳しくは柴谷（1978）第5章、益岡（1981）と奥津（1983）を参照してください。

5） 奥津（1969）でも、数量関係の「三冊ノ本」の「ノ」を「ダ」の連体形と考えている。

6） 「格順位」の概念規定に関しては、井上（1976上：188）に従う。

7） もし、友達の上着が汚れることに対して、「彼」は何かの責任を問われることなら、(36 b)の表層構文は適格の文になるであろう。ただし、これは極めて奇異な文脈ということになる。

参考文献

井上和子（1976）『変形文法と日本語（上・下）』大修館書店

奥津敬一郎（1964）「の」のいろいろ，『口語文法講座3・ゆれている文法』明治書院

奥津敬一郎（1969）数量的表現の文法，『日本語教育』（14号）日本語教育学会

奥津敬一郎（1983）数量詞移動再論，『人文学報』（第160号）東京都立大学

菊地康人（1990）「X の Y が Z」に対応する「X は Y が Z」文の成立条件，『文法と意味の間—国広哲弥教授還暦退官記念論文集』くろしお出版

北原保雄・鈴木丹士郎・武田孝・増淵恒吉・山口佳紀（1981）『日本文法事典』有精堂

久野　暲（1973）『日本文法研究』大修館書店

国立国語研究所（1951）『現代語の助詞・助動詞 ── 用法と実例 ──』秀英出版

佐治圭三（1969）時詞と数量詞 ── その副詞的用法を中心として ──，『月刊文法』(2-2）明治書院

柴谷方良（1978）『日本語の分析』大修館書店

鈴木　忍（1978）『教師用日本語教育ハンドブック③文法Ⅰ』国際交流基金

鈴木康之（1978）ノ格の名詞と名詞とのくみあわせ(1)，『教育国語』（55号）むぎ書房

鈴木康之（1979）規定語と他の文の成分との移行関係，『言語の研究』むぎ書房

陳　訪澤（1986）主題在成分関係中的位置，『科技日語』（総8号）中国湖南大学

陳　訪澤（1994 a）「魚は鯛がいい」構文の分析，『世界の日本語教育』（第4号）国際交流基金

陳　訪澤（1994 b）日本語の「の」による名詞節主題文の構造，『国語国文研究』（第97号）北海道大学国語国文学会

寺村秀夫（1981）『日本語の文法（下）』国立国語研究所

Nakau, Minoru（1973）『Sentential Complementation in Japaness』Kaitakusha

新村　出（1955）『広辞苑』（1991第四版）岩波書店

西山佑司（1989）「象は鼻が長い」構文について，『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』（第21号）慶応義塾大学

益岡隆志（1981）文法関係と数量詞の遊離，『神戸外大論叢』（32-5）神戸市外国語大学

三上　章（1960）『象は鼻が長い』くろしお出版
三上　章（1970）『文法小論集』くろしお出版
渡部真一郎（1979）日本語の分裂文について,『英語と日本語と―林栄一教授還暦記念論文集』くろしお出版

（ちん　ほうたく・北大大学院博士課程）